

J・A・コメンスキ

三月二十八日

教師の日によせて

大梶 優子



早朝の窓の下を、ランドセルを背負い、小さな花束を手にした子ども達が、学校へ向かって歩いて行く。むぎだしの花をふりまわす子、紙に包んでささげ持つ子、一本ぬけ落ちても気づかないままおしゃべりに夢中の子、さまざまである。それをながめながら、私自身もまた、二人の子ども達のために買い置いた花束を玄関先に用意する。子ども達が低学年だったころには、花束を先生に手渡す時の言葉、チェコ語での感謝の言葉を、登校前にもう一度復唱させたものである。

「先生、今日は『教師の日』おめでとうございます。毎日、私たちを一生懸命教えてくださってありがとうございます。」

朝、始業のベルが鳴って、先生を迎えた教室では、花束をかかえた生徒達が列をなして、おそらくは、授業の開始が遅れるだろう。花束を両手にあふれるように持った先生は、喜びに満ちて、この日の意義を手短かに語るだろう。我が家の子ども達か、初めての花束とひきかえにもち帰ったのは、「コメンスキー」という偉大な人物の名前だったから。

三月二十八日は、J・A・コメンスキーの生誕日である。「民族の師」「教育の師」の生誕を記念して、現在では、「教師の日」に指定されている。

国をあげての公式行事も多いことだろうが、小さな花束を間にして生徒と先生が出会う、そのささやかな行事が、私にはかけがえのない「教師の日」の意義のように思われる。

教育の諸問題、生徒の言い分、教師の言い分、親の言い分、すべてが山とある中で実現される、生徒と教師と親の「出会い」である。

「教師の日」は学校ばかりではなく、社会教育の場でも同様に祝われる。成人だけが集まるようなところでさえ、一輪ずつの花と拍手で、指導者である「先生」に感謝の意を表すのである。